図書館の利用方法

経営学部　斎藤　光恵

私は、特別読書好きというわけでもなく、1,2回生の頃は用事がある時以外は殆んど図書館を利用することはありませんでした。転機になったのはある授業でした。

その授業では毎回レポートを提出し、様々な国や文化について調べる必要があり、大変な作業でした。私は図書館に慣れておらず、一人ではどうしようもなかったので、職員の方に相談をしてみました。

そこで私は今までもっと図書館を利用しておけばよかったと思いました。ただ目的の本を闇雲に探すのではなく、OPACやデータベースなどを利用して効率よく検索することができ私の持っていた調べ方のイメージとは全く違いました。

また、名古屋図書館にない本は取り寄せもでき、学生の要望に出来るだけ応えようとする姿勢が窺えます。

自分一人の力で本を探すということは大切なことだと思いますが、図書館の利用方法の一つとして職員の方に相談をするという手段もあります。わざわざ職員の方に話しかけるのが恥ずかしいという方もいるかもしれませんが、そういう方は一度思い切って話しかけてみて下さい。職員の方は親身になって相談に乗ってくれ、その本を探してくれるだけではなく、これからどのように自分が図書館を利用すればよいか教えてくれます。

入学した時の説明だけでは図書館の利用方法を理解することは難しいと思います。実際の課題に取り組み体験してみて、自分のほしい情報を得るために図書館を利用できたら最良だと思います。

私はこの夏休みを利用して好きな作家の本を4冊借りました。図書館の1階には学生が読みたくなりそうな文庫本が沢山あります。専門書は苦手という人は一度図書館の1階開架室を覗いてみてはどうでしょうか。

「2,000ページの読書」

法務研究科法務専攻　西山　知宏

現在、自習室にある私の机は専門分野に関する、1冊何百ページもある分厚い本で囲まれており、読書とは切っても離れられない日々を過ごしている。将来の自分がこんな環境で生活していると知ったら、小学生の頃の私はどんな反応をするだろうか。

小学生当時の私は読書が大の苦手だった。特に長期休みの課題で読書感想文が出されたときなどはもう一大事だった。ただでさえ読書が苦手なのに、その感想を書けと言うのだから大変である。よく自己紹介の趣味の欄に「読書」と書く人がいるが、当時の私からすると、読書を趣味にしている人といったら、よほどの勉強家か、外で遊ぶことを好まない根暗な人くらいかと本気で思っていた程であった。

そんな私の極度の読書嫌いを直してくれたのは、中学1年生の時の担任の先生が出してくれた課題だった。私が先生に現代文の読解がうまく出来ないと相談したところ、「国語が得意になりたかったら、夏休み中に2,000ページ読書をしなさい。好きな本でいいから。」と個人的に課題を出してくれた。そして何を読んでいいのか困っていた私に1冊の本を薦めてくれた。それは『エーミールと探偵たち』という児童向けの小説であった。最初は騙されたつもりで読んでみようと読み始めたが、読み進めると意外に面白く、あっという間に1冊を読み終えてしまった。私はこの時、生まれて初めて本を読むことが楽しいと感じた。それから文庫版の小説などで興味のあるものを読んでいくと、いつの間にか先生と約束した「2,000ページ」という目標に到達していた。その時に味わった達成感は今でも忘れられない。また、それと同時に自分の読書嫌いは単なる食わず嫌いだということに気がついた。そして、自分の知的好奇心を満たす為にする読書がどれだけ楽しいものかを少しは理解できた気がした。

現在、私に日々課される難解な専門書の読解は、正直楽しい読書とは言い難い。しかし、ときどきそこに書かれていることを自力で理解できたときには、他にない悦びを感じる。これも「2,000ページの読書」のお陰かもしれない。